

企画セッション「自分の実践を他者に伝えるとは？—初めての発表に向けて—」

広瀬和佳子（神田外語大学）・宮崎七湖（新潟県立大学）

1. 本企画の趣旨

本セッションは、2013年度、2014年度に実施した「始めよう！実践研究」の内容を、「実践を他者に伝えること」に焦点を絞って行ったものである。これから実践研究をしてみたいと思っている人を対象に、発題者と参加者、そして、参加者同士のやりとりを通して、以下の3つの目的を達成することを目指した。

- (1) 自分がなぜこの実践をやっているのかを明確化する
- (2) 自分の実践を他の人に伝えられるようになる
- (3) 次の実践を改善するための問題意識を持つ

セッションには8名が参加した。4名ずつ2グループに分かれ、以下の活動を行った。参加者人数は少なかったが、委員も交え、一人ひとりの実践についてじっくり話し合う時間を持つことができた。

2. セッションの流れ

まず、自分の実践を振り返り、自分が実践で目指していることや大切にしていること、ならびに、成功や失敗の経験を内省するための活動を行った。具体的には、自分がこれまで行ってきた教育実践の中で、他者と共有したいと思うもの（成功例でも失敗例でもよい）を一つ具体的にイメージし、ワークシート1に記入する。次に、その実践を他者に伝えるために必要な要素は何かを考え、ワークシート0に記入する。そのあと、ワークシート0に書いた実践の背景を踏まえ、ワークシート1に記入した実践事例をグループメンバーに説明してもらった。

自分の実践を他者に伝えるためには、実践が全体の文脈の中のどこに位置するのか、その位置付けを意識することが重要である。例えば、ある活動は授業の中に、授業は科目の中に、科目はプログラムの中に、プログラムは教育機関の中に存在し、それぞれにはそれぞれの目的がある。自分が他者に伝えようとしている実践は、どこに位置しているのかを意識して、明確に伝える必要がある。昨年度は、この実践の位置付けを意識する活動が時間不足で十分に行えなかったため、今年度は、まず実践の背景とともに実践事例を具体的に他者に説明することを重視した。

最後に、「次の実践を改善するための問題意識を持つ」ための活動を行った。ワークシート1の続きとして、自分の実践がうまくいっている、あるいは、うまくいっていないことを他者に示すためのデータがあるか、次の実践に向けて改善すべき点は何か、なぜそう思うのかを、ワークシート2に記入した。ワークシート0, 1, 2を並べると、実践研究として発表するために最低限必要な要素を概観できるようになっている。自分が先に説明した実践事例において、どの要素が不足していたのかを意識しつつ、グループで、それぞれが次に行うべき実践研究の方向性について話し合った。今回の活動では、実践の分析・考察という、実践研究の重要な要素について詳細に議論する時間はなかったが、実践を他者に伝える意義や、そのために必要な要素については、参加者で認識を共有できたのではな

いかと考える。

3. 参加者からの声

参加者から寄せられたセッションに対するコメントをもとに、今後の課題について検討する。

1) セッションに期待したこと

「なぜこのセッションに参加しようと思ったのか」という問いに対し、「実践研究や実践をどう捉えたらよいか分からなかったから」、「自分の実践をきちんとした形で伝えたい」、「伝えようとしたが、うまく伝えられなかったから」、「自分の実践を振り返るため」などの回答があった。参加者は、自身が日々行っている教育実践をどうしたら他者と共有できるのか、そのための方法論に関する示唆を得ることを期待してセッションに参加したことが分かる。

2) 参加して感じたこと

実際にセッションに参加してみて感じたことや学んだこと、得られたこととして、「グループメンバーからの意見・コメントが大変参考になった」というような回答をする人が多かった。また、「自分が持っているものの再整理になった」「自分のこれまでを振り返ることができた」のように、自分自身に対する気づきや問題点の整理をあげる人もいた。さらに、「発表に向けて準備することや整理する内容」「教師観を明確にすること」「どこにオリジナリティを出すのが学べてよかった」「良い方法は、授業内容に関わらず、他の状況にも応用できること」といった、実践研究の方法論に関して参加者自身が得た具体的な示唆が書かれているコメントもあった。

一方、もっと詳しく知りたかったこととしては、「良い実践研究の例や悪い例、その理由、発表応募時の注意事項」「自分の報告にはどんな情報が不足していたのか」「参考書」といった、自身の実践研究に対する具体的なフィードバックとなりえるような情報があげられていた。これらの回答からうかがえるのは、グループで互いの実践を語り合うことで、問題点や悩みを共有し、多様な視点から実践改善のアドバイスが得られた点で満足度が高かったこと、また、そこからどのように実践研究につなげられるのか、各事例に対する個別で具体的なフィードバックおよび研究支援が求められているという点である。

4. おわりに

少人数での対話セッションのよい点として、参加者一人ひとりの実践についてやりとりできる点があげられる。論文や口頭発表で実践を他者に伝える場合、内容は簡潔に、論旨は明確で一貫していることが重視される。しかし、実際の実践の場は複雑で、さまざまな要素が絡み合っており、文脈を共有していない他者にその全体図を説明するのは大変難しい。だからこそ、方法論が求められているのだと思われるが、実践が多様であるように、それを描く方法も唯一の正解があるわけではない。他者とのやりとりを繰り返すことで、自身の実践を語る方法が見えてくるのではないだろうか。今後は、そのような気づきを促すために、どのような対話の場やリソースの提供ができるのか、セッションの工夫・改善を考えていきたい。

(文責：広瀬和佳子)